

味ある症例と思ひ報告した。

2) 胆嚢癌術後の肺塞栓症に対し ECMO ならびに塞栓摘除後、ビリルビン吸着療法を施行した1例

中山 卓・渡辺 健寛
名村 理・菅原 正明
斉藤 憲・林 純一 (新潟大学第二外科)

腹部手術後、急速に発症・増悪した肺塞栓症に対し、ECMO 補助後、塞栓摘除を行い、さらに術後の高ビリルビン血症に対し、血液浄化療法を併用し、救命し得た症例を経験したので報告する。

症例は61才、女性。胆嚢癌術後、第5病日目、急に低酸素血症、sub-shock 状態となった。種々の検査で肺梗塞症と診断され、まず保存的治療を試みたが改善なく、また LOS の状態であったため ECMO を導入した。その後の造影で、主肺動脈からの広範な塞栓症であり、塞栓除去術を施行した。術後 ECMO からの離脱は可能であったが、次第にビリルビンの上昇を認め、連日血液浄化療法を施行した。また気胸・膿胸の併発もあり、管理に難渋したが、約5ヶ月目に退院した。

重篤な広範囲肺梗塞症患者を ECMO で維持しながら手術に持ち込み、さらに血液浄化療法で、体内環境を改善し得たことが、良好な結果を得られた要因と考えられた。

3) 透析患者の心血管管理

—長期透析患者の死因における左室肥大の重要性—

萩野下 丞・鈴木 正司 (信楽園病院 腎センター)
小山 仙・横山 明裕 (同 循環器内科)
筒井 牧子 (同 循環器内科)

長期透析患者の死因の中で心血管合併症の占める割合はおよそ50%と言われ、依然として大きな位置をしめている。長期透析患者では心血管系の危険因子の1つである高血圧の合併も45~50%と多く、心電図、心エコー図(以下 UCG)において高率に左室肥大所見を認める。今回長期透析患者の UCG 所見より、心肥大と予後の関係、すなわち長期透析患者においても左室肥大が心臓血管死の危険因子であるかについて検討した。また長期透析を経た患者の10年間左室肥大所見の変化について検討した。

目的：1. 長期透析患者における心臓血管死群と非心

臓血管死群を比較し左室肥大と心臓血管死の関係を検討する。

2. 長期透析患者における左室肥大の変動と、それに影響する背景因子を検索する。

対象：1. (死亡群) 透析開始後10年目に UCG を施行し、透析20年目までに死亡した長期透析患者で、当院にて透析導入時より死亡時まで経過観察し得た30人。

2. (生存群) 透析10年目に UCG を施行し当院にて20年目の UCG を再度施行した長期透析患者38人。この中で34人は当院で20年間以上の経過を観察し得た。

方法：1. 透析10年目に UCG を施行し各パラメーターを算出した。

2. 死亡群の直接死因から心臓血管死群と非心臓血管死群とにわけ、UCG 所見、心胸郭比、体重増加率、血圧、血液所見を比較した。

3. 死亡群に20年以上経過した生存群を加え、生存曲線にて左室肥大と心臓血管死の関連を解析した。

結果：1. 長期透析例において心臓血管死群は、非心臓血管死群と比べて、左室肥大の程度が高度で、降圧剤の内服者が多かった。

2. 上記2群において、CTR、除水率、血圧、貧血、KT/V、透析開始年齢には差が無かった。

3. 長期透析患者における左室心筋重量は透析10年目に比較し、20年目では有意に低下していた。

4) 慢性腎不全血液透析患者のシャント血管狭窄に対する PTA の経験

寺邑 朋子・吉田 和清 (新潟市民病院 腎臓内科)
菊池 正俊 (同 腎臓内科)
三井田 努・小田 弘隆 (同 循環器内科)
樋熊 紀雄 (同 循環器内科)

【目的】シャント狭窄に対する PTA (percutaneous transluminal angioplasty) の効果と問題点について検討した。

【対象】平成6年7月から平成9年1月までに、新潟市民病院でシャント狭窄のため PTA を施行した男性4例、女性4例(平均年齢54.3歳、平均透析期間2.9年)。

【結果】8症例に対して合計16回の PTA を施行した。PTA の技術的成功率は88.9%であった。成功例の3カ月、6カ月、1年開存率はそれぞれ43.8%、18.8%、18.8%であった。1回の PTA によるシャント開存期間は29日~2.5年で、再狭窄のため2回以上 PTA を施行した例については、PTA 1回の開存期間は平均86.1日であった。PTA によるシャントの累積開存期間は29

日～911日で、累積開存率は6カ月で57.1%、1年で42.9%であった。PTAによる合併症は認められなかった。

【考察】PTAは外来で施行でき、患者への侵襲が少ない利点があるが、コストの面や、有効期間が短いという点で問題が残されている。しかし、1回の開存期間は短くとも、繰り返し行うことでシャント寿命の延長が可能であり、糖尿病などでシャント閉塞を繰り返し、外科的再建を度々必要とする症例では、シャントを長期に維持していくために有効な方法と考えられる。

第35回新潟化学療法研究会

日 時 平成8年6月15日(土)

会 場 ホテルイタリア軒

I. 一 般 演 題 I

1) 高齢者の薬剤アレルギー

宇野 勝次・八木 元広(水原郷病院薬剤科)
鈴木 康稔・関根 理(同 内科)

薬剤過敏症疑診患者210例(被疑薬剤708剤)を対象に白血球遊走阻止試験(LMIT)による原因薬剤の同定を行い、加齢と薬剤アレルギーについて検討した。LMITの陽性率は10歳未満と60代にピークを認める二峰性を示し、1,143例の血中リンパ球数と関連した。LMIT陽性患者は加齢と伴に増加し、50～70代に高頻度を示し、投薬患者10,571例の年齢別頻度と関連した。LMIT陽性薬剤は、65歳以上の老年者では若年者に比べ循環器官用薬の頻度が高く、7,642例に処方各薬剤群の年齢別頻度に関連した。LMIT陽性の薬疹患者80例の潜伏期間は、加齢と伴に長くなり、老年者は若年者の2倍以上を示し、リンパ球活性も加齢と伴に低下する結果を得た。したがって、高齢者の薬剤アレルギーは、頻度が高く、起因薬剤として循環器官用薬の頻度が高く、潜伏期間が長い特徴を有する。これは、加齢に伴うリンパ球活性作用、服薬患者数ならびに服用薬剤の変化に起因するものと考えられる。

2) 眼科領域におけるブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌の現況(1992～1994年)

宮尾 益也・阿部 達也
笹川 智幸・飯塚 裕子(新潟大学眼科)
大石 正夫(信楽園病院眼科)

【目的】眼科領域におけるブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌の検出状況について調査した。

【方法】新潟大学眼感染症クリニックで、1992～1994年の3年間に眼感染症患者より非発酵菌が検出された14症例、19株を対象とし、検出状況を検討した。

【結果】1. 非発酵菌は全検出菌2.8%、グラム陰性桿菌の38.0%を占めた。2. 症例は角膜潰瘍5例、慢性涙囊炎3例、慢性結膜炎2例、急性結膜炎、急性涙囊炎、新生児涙囊炎、角膜炎各1例の計14例であった。3. 菌種はAcinetobacter属7株、Pseudomonas属4株、Flavobacterium属、Achromobacter属、Xanthomonas属、Sphingomonas属各1株、同定不能4株であった。4. 非発酵菌単独で検出されたのは全体の11.8%で、他は2～6種の複数菌として分離された。内訳はCorynebacterium 9株、CNS 8株、嫌気性菌5株、 α -streptococcus、他の非発酵菌各3株等であった。

3) 当院における M. avium complex 症の治療

吉川 博子・青木 信樹(信楽園病院)
薄田 芳丸(内科)

【目的】難治性で、確立された治療法のない M. avium complex 症に対して SPFX が有用であるかどうか検討する。

【方法】1993年12月、肺 M. avium complex 症の1症例を SPFX 200 mg 連日服用で治療。その後、4症例を、SPFX 200 mg 隔日処方で治療し、効果について検討。

【結果】case 1-case 4 は、臨床的にも細菌学的にも治癒した。

case 5 は、6カ月治療し、臨床的にも細菌学的にも軽快しているが、現在も治療中である。

【考察】全例、臨床的にも細菌学的にも有用であったが、case 5 は、発症当初、気管支に病変の主座があり、他の症例より、菌の陰性化に時間を要した。M. avium complex 症の臨床病型の違いが、治療効果に差を及ぼしている可能性が示唆された。